

令和7年度第1回スルメイカ担当者会議

(議事概要)

令和8年1月5日から9日にかけて、メール形式により標記会議を開催した。本会議では、スルメイカ冬季発生系群および秋季発生系群について、3通りの加入量予測値に基づく2026年漁期漁獲量推定値の試算に関し、水産庁からの事務連絡への回答について検討を行った。

依頼内容に基づき分析を進め、両系群それぞれについて文書案を1本ずつ作成し、本会議において諮問した。文書案について参加者からのコメントを受け、それらを踏まえて修正を行った結果、当該文書案は承認された(FRA-SA2026-SSC01-01、FRA-SA2026-SSC01-02)。

コメントと対応・回答

1. 再生産関係の仮定について(冬季発生系群、秋季発生系群)

【コメント】再生産関係の仮定について、依頼案(シナリオ1~3)は通常 of 再生産関係を前提としているが、これは資源が高水準であった時期を含む平均的な関係であり、近年の低水準期の実態よりもやや楽観的な加入量を想定している可能性がある。冬季系群では今年度に比較的良好な加入が見られたものの、低加入期からの脱却と判断するには、なお数年のデータ蓄積が必要と考えられる。秋季系群では親魚量が限界管理基準値を下回っている。こうした資源状態の下で、単年性資源であるスルメイカに楽観的な仮定を置いた管理を行うことは、過度な漁獲を招き、資源回復を阻害するリスクがある。このため、これらのリスクを明示した上で、評価書で用いられたバックワードリサンプリング法による推定値の使用を推奨する旨の見解を、研究機関として文書に記載してはどうか。

【対応・回答】文末を下記内容のとおり修正・加筆した。

“いずれのシナリオにおいても、2026年漁期の予測加入量は、令和7年度資源評価においてバックワードリサンプリング法により得られた同年の加入量(岡本ほか2025)より大きく、その結果、平均漁獲量も相対的に多い値となった。資源評価における将来予測では、直近年の加入状況に近い将来においても継続することを仮定した確率的手法が用いられている。一方、本試算における加入量の予測は決定論的に計算されており、この点において資源評価に基づく将来予測と比べてより高い加入量を前提とした結果となる。以上を踏まえ、本試算による2026年漁期の予測漁獲量は、資源評価に基づく将来予測を代替するものではなく、想定よりも良好な加入が生じた場合の影響を把握するための参考値として位置づけることが適当である。”

2. シナリオの提示方法について

【コメント】シナリオ2および3は、確率的に稀な好条件を前提とした設定と読み取れる。これらを基にした試算をステークホルダー会合等で示した場合、楽観的なシナリオ3が採択され、過度な漁

獲につながるおそれがある。今後の検討会資料では、シナリオ 1 を主な回答とし、シナリオ 2・3 は感度分析としての参考値として位置づけて示すことが望ましい。

【対応・回答】本件は依頼への回答であるため、文書ではシナリオ 1～3 の試算結果を軽重付けせず、フラットに示すことが適切と考える。

【別紙】水産庁からの依頼内容

スルメイカの資源評価における試算等についてのお願い

スルメイカ秋季発生系群及びスルメイカ冬季発生系群の資源評価結果について、以下の条件での試算および次回の資源管理方針に関する検討会等における説明をお願いいたします。

- (1) 令和7年度資源評価結果に基づき、以下の3通りの条件においてそれぞれ予測を行い、2026年の加入量を算出する（決定論的に求める）。
 1. 通常の再生産関係による加入があった場合
 2. 通常の再生産関係式において、観察データの90%が含まれると推定される範囲の上側5%（95percentile）と、通常の再生産関係に相当する加入の中間的な加入に相当する加入があった場合
 3. 通常の再生産関係式において、観察データの90%が含まれると推定される範囲の上側5%、すなわち95percentileに相当する高加入があった場合
- (2) (1)で想定した3通りの加入量の場合に、令和7年度の漁獲管理規則案に基づく漁獲量をそれぞれ算出する。

以 上